日本古典全書

山家集

監修　佐佐木信綱　新村出　津田左右吉
辻善之助　山田孝雄　和辻哲郎

山家集

伊藤嘉夫校註

朝日新聞社刊
日本古典全書

日本古典全書
「山家集」　伊藤嘉夫校註
昭和二十二年十二月三十日初版發行
昭和三十年十一月二十五日第四版發行
組版所　株式會社井村印刷所
印刷所　株式會社東和印刷
發行所　朝日新聞社（東京都千代田區有樂町・大阪市北區中之島・小倉市砂津・名古屋市廣小路）
定價　二九〇圓

目次

解説……三
一、西行と歌……三
二、山家集……六
三、西行の諸集……八
四、山家集大成本……一三
五、花と月と……一七
六、明治以後の西行文献……二一
凡例……二三
本文……二七
山家集上……二七
春……二七

夏……一五〇
秋……一六一
冬……一九〇
山家集中……二〇三
戀……二〇三
雜……二一七
山家集下……二六六
雜……二六六
補遺……二三二
聞書集……二三二
閑書殘集……二六八
西行和歌拾遺……二七六
存疑・誤傳西行和歌……三〇五
一、存疑……三〇五
二、誤傳……三一三

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

山家集

伊藤嘉夫

解　説

一、西行と歌

願はくは花の下にて春死なむそのきさらぎの望月のころ

と詠んで、かねて釋迦入滅の日にその終りをとらうことを願ひ、奇しくも、建久元年二月十六日、河内の弘河寺で七十三歳の生涯をとぢた歌僧西行は、一代の風雲兒平清盛と年を同じうして、俵藤太秀郷が九代の末、佐藤左兵衛尉康清の子と生まれ、家富みし武門に育ち、鳥羽院の北面として射御に、蹴鞠の道にすぐれた青年武士、佐藤左衛門尉義清（また範清・則清ともいふ）その人であつた。解きえない謎をひめて保延六年二十三歳をもつて出家してからは、專ら山林に入つて世の絆を斷ちきるといふでもなく、あるいは諸國に杖をひき、あるいは權門に出入して、和歌の譽れは當代にあつて、すでに高名を博してゐたのであつた。

人は、惜しげなく富貴と榮達とをかなぐりすてて、若きままに出家して、一杖一笠の旅におくつたかれの生涯を、ただ無慾無執着の歌僧に思ひなし、その歌も心のすすむに隨つて詠みすてて留め殘さうとしなかつたであらうと思ふかも知れないが、かれが生涯を通じて忘じがたかつたものは花と月と自然の

閑寂と、人の思ひへの愛情と、それをよみ出でる和歌そのものであつた。この和歌を愛する心は、富貴と榮達とを捨てた胸のうらうへに、一途にもえたつ生涯の妄執となつたのであつた。大峰にこもり、高野に修道の間も歌を忘れることはなかつた。崇德上皇讃岐御遷幸の事のあつたのち、世の亂れに亂れたのをなげいて寂然に贈つた歌には、目にみえて歌道の衰へてゆくことをしみじみ悲しがつてゐる。自らの歌に生涯をかけてゐた西行は、また自分に對するそこはかとない世の聞えにも無關心ではなかつた。千載集の撰ばれることをきけば、高野からいちはやく詠草を俊成のもとにおくるかれであつた。

治亂興亡、盛者久しからざる世の相をまざまざと見せられた西行の生涯のうちでも、特に晩年の世相はあわただしかつた。しかもそのあわただしい源平の戰につぐ戰に、兵亂の京都をよそにした西行は、奥州への再度の旅行をさしはさんだ數年の間をおほむね伊勢にすんだ。清盛も死に、平氏にあらざればと豪語した人も世を去り、京の都を蹈みにじつた旭將軍も敗死してしまつた。さうした歷史的轉變をよそながら聞き、老いた歌僧の心は波うたうとするが、しかも靜かな伊勢の生活は大神宮の神官の弟子にかこまれて、歌にあけ歌にくれるその日その日ではあつた。おそらく西行にとつては、この時代だけ、まことの意味の弟子があつたのであらう。そして、この弟子らのために講じた歌がたりが西公談抄であり、その歌の一部分の聞き書きされたものが聞書集なのである。かくて老來いよいよ歌及び歌壇への關心が深まり、伊勢大神宮法樂結緣のために、二見百首の勸進を發起して、當代歌壇の宿老と新進、俊成・

慈圓・定家・寂蓮・隆信・家隆・公衡らをすぐつて勸進した。そして、これらの人々は當時またはその後の歌壇の主流となる實力を持ち、または持つに至つた秀れた歌人なのであつた。自分の歌についても十二社奉納のために、十二卷の各三十六番自歌合を撰ぶといふ生涯の事業にとりかかつた。自歌合といふ形式も、歌壇においてはいまだ行はれてゐなかつたものをはじめて行つたもので、うち、御裳濯河歌合は内宮へ、宮河歌合は外宮へ、それぞれ奉納し、前者を俊成に、後者をいまだ若かつた定家に、判を乞ふためにおくりとどけ、そのかたはら二見百首を各作家に勸進しておいて、文治二年老軀六十九歳の身をひつさげて、再度最後の東國修行に發足したのであつた。

翌る年、東國修行から歸つた西行は、勸進しておいた二見百首をはたつて京洛の歌人の間をめぐり、嵯峨野あたりにゐたりしたが、文治五年のくれには河内の弘河寺で大患をわづらつた。その病床に御裳濯河歌合の判がとどけられ、さらに宮河歌合の判がとどけられた。そのときは自ら頭をもたげて休み休み二日がかりで讀み、大いに喜んだ。（贈定家卿文）そのうち病氣もややよくなつたやうに見えたが、年あらたまつて文治六年すなはち建久改元の二月十六日に急に入寂した。（長秋詠藻・拾玉集・拾遺愚草）ときに七十三歳であつた。

西行七十三歳の天壽は必ずしも短いものではないが、俊成（九十一歳歿）・定家（八十歳歿）・家隆（八十歳歿）の長壽に比べて、いまだ數年のいのちは考へられる健康を、常には持つてゐたと思はれる。七

十歳の老軀をもつて陸奥の大旅行をはたしえた健康への自信において、かれ自身も死ぬなどとは思はなかつたことだらう。河内弘河寺はかりそめの旅であつて、再び伊勢にかへり、十二社歌合の完成に力めようとしたのであらう。ところが山寺の寒さにあたつて肺炎などのやうな病氣にかかり、平素の健康にまかせて無理をして、ぶりかへして死んだのではなからうか。すなはち自ら自分の歌の整理を思ひ立つて、そのしごとへの豫定を考へつつ旅に死んだのであらう。十二社奉納の自歌合は、兩宮歌合だけ完成し、(拾玉集に瀧原歌合の名は傳へてゐるが、歌合そのものは傳はらない)あとは未完成のままになつてしまつた。このやうにして西行の歌は、幾種類かの作品集として殘つたのである。

二、山家集

山家集の名稱は、「山家に於ける詠を輯めた集」といふほどの意で、サンカシフと訓む。尾崎雅嘉の群書一覽をはじめ、國書解題、大日本歌書總覽、日本文學大辭典などみなかう訓んでをり、ヤマガシフと訓むのは誤りである。六家集(長秋詠藻・拾玉集・拾遺愚草・月清集・玉吟集・山家集)の諸集かその題號を音讀されることによつても、山家集(さんかしふ)と音讀すべきである。

山家集といへば、直ちに六家集本山家集を意味するが、古くは山家集の題號で、少くとも二種以上の西行の集が傳へられた。いまその一つを六家集本山家集、他を異本山家集と區別してゐるが、今日の異

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

本山家集が、實は六家集成立當初は、その一部であつて、例へば、牡丹花松柏の六家抄（六家集の各集から秀歌を抄出したもの。永正二年―二一六五年成立）のなかの山家抄は明らかに今日の異本山家集の排列順次に抄出してゐることによつても證される。現在傳へられる六家集本山家集の寫本は、文祿三年季春上幹と細川幽齋の奥書をのせてゐるのから見て、六家抄の成立年代永正二年から文祿慶長の幽齋の時代にいたる約百年の間に、何人かによつて置きかへられたものと信ぜられる。

千載集以下勅撰集に採られた多くの西行の歌が前の二書の何れによつたかといふことは、急に定め難いが、少くとも夫木抄（一九七〇年ころの成立）には現在の六家集本山家集のさらに歌數の多い集を用ゐてゐる。但し西行上人家集の名は見えるが、山家集の名は見えない。これはこの書の他の例でも人名を冠して家集を呼んでゐるから、山家集と呼んでゐなかつた例證にはならない。すなはち、その出典に家集と稱して採つた歌は、概ね六家集本山家集からであるが、何れの西行の集にも見えないものもある。

山家集の書名が文献に見えた最初は、頓阿の高野日記である。「西行上人みづから書き給へる山家集を、周嗣傳へられけるを、法隆寺僧房の火の時（編者註―康元元年）燒け侍りける、其後、西行の筆につゆたがはず書かれ侍りしを見せられ給ひしなり云々」と。この日記にいふ周嗣の傳へたと稱する山家集は、異本山家集で、周嗣の觀應二年（二〇一一年―西行歿後約一五〇年）の奥書を掲げてゐるから、このころ明らかに西行の集に山家集の名が冠して傳へられたのである。

要するに二種の山家集のうち、六家集本山家集の所傳は、異本山家集に先行するものであつて、歌數は今日の流布本で見ても前者は後者の約三倍を收めてゐる。すなはち、本全書の山家集は、西行歌集の最も古い所傳を有し、最も歌數の多い代表歌集である六家集本山家集を、遡り得るかぎり源流を求めて集大成したものである。

三、西行の諸集

竹柏園架藏の古鈔本山家集の奥書に、「山家集歌三千百十二首也。其中より三重集をばえらび出でられたるなり。但百首をのぞかれたり。此山家集本歌の次第もしどけなく亂れ侍り、歌の數もいま三十一首足らず。正本は奈良伊勢にぞ侍るなる。尋ねとりて書かるべし」とある。この文意からいふと、この集は西行の自撰で歌數は三一一二首とあり、この正本によると、ほとんど西行の全歌を識ることが出來ようけれども、七百五十年の星霜はその在處を覆うてしまつた。この古鈔本さへ卷末五十數葉三百餘首の殘闕本にすぎない。すなはち現在知られてゐる西行の全歌數は數種の家集と兩宮歌合、勅撰集、私撰集及び當時交遊のあつた人の家集その他に傳へられてゐる西行の作を集め、その重複をのぞいて出た數が一九八六首で、この書の奥書の三一一二首の三分の二に達しないのである。

つぎに現在殘つてゐる西行の作品集について略記すると、

（イ）流布本山家集　六家集本山家集の板本。藍表紙。題簽に六家集山家とあり、内題には山家和歌集とある。上下二冊にわかち、さらに上卷を四季と戀、下卷を雜とし、雜を上下に分けてゐる。歌數一五六九首中、重出一首、他人の歌七六首。六家集のうちに加へて江戸時代初期に開板されたため、最も多く流布するものである。但しこれより前六家集の板本のあつたことは、寛文書目に六家集三十一冊、また典籍秦鏡に六家集三十冊とあつて、このうち山家集三冊とある。まだ管見にふれないが、おそらくは現存する六家集の原本で、これを十八冊に合本したものであらうかと思はれる。さうすると、山家集は、いまの下卷はそのうち上下に分かたれてゐる部分から分けて二冊になり、合はせて三冊であつたことが容易に想像される。寫本に比べて歌數の多い本が底本になつてゐるけれども、誤寫・脫落が多少ある。元祿三年開板といはれるが、奥書刊記はない。六家集からこの本だけを單行したのち刷本もあつて、神宮文庫その他に藏されてゐる。

（ロ）近衞家本山家集　六家集本山家集の系統に屬する古寫本で、近衞公爵家の所藏。現在京都帝國大學に寄託されてゐる三冊本である。宮内廳書陵部藏桂宮舊藏本・柳瀨福市氏藏古鈔本も同系の本である。歌の實數一五五三首、流布本にない歌が七首あり、流布本にある歌が二十三首ない。歌の順序の相違、詞句の異同が多い。善寫本である。

（ハ）玄旨本山家集　三冊。六家集本山家集系の本。すなはち前項の本を寫させて細川幽齋が

原本と校合したとの奥書がある。宮内廳書陵部藏の一本。竹柏園藏溫古堂本・神宮文庫本などはこれに屬する本であるが、ともに轉寫本である。

（ニ）松屋本山家集　小山田與清舊藏本、現在所在が不明になつてゐる。いま板本に與清門下の人が、その本によつて書き入れした本を平井卓郎氏が藏されてゐるので、わづかにその面影をうかがふことが出來るのみである。すなはち、前にかかげた竹柏園藏古鈔本山家集と同じ奥書をもつ本であるが、三一一二首の全本には遠い。家集・撰集などに所見のない西行の歌が六十八首あり、この本自身は書き入れによつて推すと、甚だ誤字・脫字・脫落などが多いものであるが、未見の歌を含むとともに、山家集の源流をさぐる、最も有力な手がかりの一つとして、貴重な文獻である。（昭和九年六月雜誌「文學」拙稿、同十年四月同誌平井卓郎氏論文參照）

以上四種類の本が、六家集本山家集の系統及びその源流に屬するもので、互ひに出入する歌を整理して一六四六首となり、流布本より七四首多いけれども、松屋本の奥書に比べるとまだ一四六九首少い。

（ホ）聞書集　伊達伯爵家藏。國寶。桝形本胡蝶裝一帖。定家手擇本。西行の集のうちかれと同時代の書寫になる古鈔本としては唯一のもので、扉の聞書集は藤原定家の筆、本文は別筆で寂蓮筆の極書がある。短歌二六一首、連歌二首を收める。新古今集撰進の料に用ゐられ、ついで、夫木抄の資料に用ゐられてから、六百年以上學者の目にふれることもなく、埋もれて久しかつた集で、

最近發見せられた書である。

（ヘ）聞書殘集　宮內廳書陵部に寫本二種二本がある。ともに桝形本胡蝶裝一帖で、表紙に殘集とある。短歌二十五首、連歌十四句を收めてゐる。この添狀の寫を卷首にかかげてゐるが、これによると、新古今集撰定の資料にされたものと覺しく、新古今集に一首撰入せられてゐる。聞書集・聞書殘集はもと一聯のものであつて、六家集本山家集と重複のないことは注意すべきである。

（ト）西行法師家集　刊本。半紙本四冊で、春夏秋冬戀雜にわかち、歌數五九三首、四首重複してゐるので實數五八九首。延寶二年の刊行で、六家集の板本が寛文書目に出てゐるところから見ると、それよりやや遲れて板になつたものであるが、重出・誤刻があり、歌數が少く、惡本のため世に行はれることがすくなかつた。

（チ）西行上人家集　いま前項とわかつためにこの名をかかげた。板本とやや同じ排列をもち、西行家集・西行上人集・西行法師集・西行上人家集・西行法師家集または、西行山家集などと呼ばれる場合もある一群の寫本で、おほむね五九七首、定まつた奥書はない。竹柏園藏西行法師集・石川縣圖書館藏西行上人家集・家藏西行上人家集などはこれである。

（リ）異本山家集　藤岡東圃博士舊藏本。前項西行上人家集とほぼ同じく、五九七首、奥に頓阿の奥書、歌一首、さらに觀應二年七月周嗣の奥書をかかげてゐる。現在は石川縣圖書館所藏に歸

してゐる。室町頃の寫本である。

（ト）（チ）（リ）は、要するに同一系統に屬するもので、校合增補し、重出をのぞくと、六〇一首となり、これは六家集本山家集、聞書集、殘集の一連とは全く系統を異にするもので、照合するとき、四六四首重複し、一三八首が新らしい歌である。四季の部は比較的整備してゐるが、なほ戀・雜部はいまだ整備されたものではない。

西行が自ら家集を撰ばうとしたであらうことは、その歌に對する執着、その心境を思ふことによつて察せられるが、これをはたしえたかは別問題である。晩年、自歌三十六番歌合一部一卷とし、十二卷十二社に奉納を企て、西行がその長い生涯の歌の總決算としようとしたもののうち、次の二卷のみが傳はつてゐる。

（ヌ）御裳濯河歌合　左を山家客人、右を野徑亭主として三十六番につがへた自歌合で、伊勢神宮內宮に奉るために、いままで詠みためた詠草から自信にみちた歌を定本的に三十六番を撰んだもの。俊成の判を附してゐる。

（ル）宮河歌合　外宮に奉るため西行が自歌を三十六番につがへた自歌合で、左を玉津島海人、右を三輪山老人としてゐる。撰出の態度も、御裳濯川歌合と同じく、心を潛めて秀歌を撰り、推敲をかさねてあつめたのちに、まだ若かつた定家の判を請うたもの。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.